

空手道詳説（36）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（1）沖縄の言語

カ 琉球に住んだ人々と日本語からの分離時期

世界中の言語の中で、日本語に関しては他に類例が見当たらないため、言語界の孤児と言われている。

日本言語学会会長の要職を務め、我が国言語学界第一人者者の服部四郎（1908～95年、東京大学名誉教授）の著書「日本語の系統」119頁に次の文章がある。

日本語と同系であることの証明のできるのは琉球語だけであって、その他の諸言語との親族関係は未証明である。

上記のとおり、本土で使われている日本語と琉球方言諸語の類似性は、同一言語から分離したと確実視されており、日本語が何れかの時代に九州方面から南下した人たちによって持ち込まれ、それまで住んでいた人たちの言葉と入れ替わった可能性が高い。このようなケースにおいて、元々使われていた言葉を「基層言語」、後から入ってきた言葉が影響を及ぼすことを「言語接触」という。

琉球諸島に人が住んだ歴史は、後期旧石器時代（約3万5年前から、縄文時代に移行する1万6千年前までの無土器、先土器時代人）より前であることは確かである。それが証明されたのは、1967年沖縄県島尻郡具志頭村港川（現・八重瀬町字長毛）の石灰岩石切場で9体の化石人骨が発見され、その地名から取って「港川人」と名付けられた。この化石は全身骨格の形で残っており、我が国の完全な人骨化石とし



て最も古い。本土の場合は、火山活動が多く土壌が酸性に傾き、骨が溶け易く化石として残り難いせいである。

右上の写真は、国立科学博物館に展示されている港川人の化石レプリカである。身長は男性で153～155 cm、女性は144 cmと小柄で、肩や腕の筋力は弱かったが、握力と咀嚼力（噛む力）は強かったことが骨から読み取れるという。東京大学名誉教授・鈴木尚（1912～2004年、人類学者）により、港川人は約1万8千年前に生存していたと考察されている。



スンダランドの想定図

港川人の発見から暫くの間は、彼らは縄文人の先祖でないかといわれ、復元模型も縄文人に似せて作成されていた。その後、2009年に発表された研究結果により、港川人を縄文人の祖先とする考えに疑問が投げかけられ、更に詳しく分析した結果から、現在の人類ならオーストラリア先住民やニューギニアの集団に近いという説が有力となっており、最後の氷河期（約7万年前に始まり約1万年前に終了した）による海面低下に伴って存在したスンダランドから移動したのでないかと推

定されている。上の地図は、埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」から引用した。

また、渡辺延志（1955年～。ジャーナリスト、歴史資料研究者）によれば、港川人より後の時代になり、東南アジアから農耕文化を持った人たちが移動して住み着き、港川人のような人たちの集団は、オーストラリア方面に限定されたのではないかと述べている。（「港川人、縄文人と似ず顔立ち復元、独自の集団か」朝日新聞2015年12月23日による。）

もう一つ特記すべきは、2012年に行われた沖縄県南城市の「サキタリ洞遺跡」の発掘調査で、炭素年代測定により約2万3千年前と判定された世界最古の釣針が出土したことである。同所からは、更に遡る3万5千年前の焼き跡が残る鹿の骨、3万年前の幼児頭骨、9千年前の埋葬された人骨の出土などである。（2016年9月20日、朝日新聞他の記事による。）

縄文人と呼ばれる人々は、約1万6千年前から約3000年前まで1万3千年もの間、縄文式土器をはじめとする独特の文化をもって北海道から沖縄諸島まで分布し、彼らは現代日本



2万3千年前の釣針

人の直接の先祖と考えられている。縄文人集団の中にも、時代や地域による差がみられるが、それでも次の弥生時代（約 3000 年前から 3 世紀中頃まで）やそれ以降の日本人集団と比較するなら、時代や地域差の程度は少ないといわれている。（「日本人の骨とルーツ」33 頁から）

また、国立歴史博物館副館長で総合研究大学院教授の藤尾慎一郎（1959 年～）他の説によれば、縄文人と港川人の間には連続性が観察できない 1 ないし 2 の間隙（ミッシングリンク）があるという主張も見逃せない。

ともあれ、琉球諸島には、少なく見積もっても 3 万 5 千年以上前から人類が住んでいたことだけは確かである。

音声による言語の始まりは、シジュウカラなど小鳥の鳴き声にも言葉に通じる法則が認められたり、様々な野生動物に見られる発声による意思表示法から更に発展し、出アフリカ（アフリカから出てアジアやヨーロッパに拡散）が始まる 10 万年前頃からだろうと、化石の分析結果から読み取れるという。

当然のこと、港川人やそれ以前に住んでいた旧石器時代人も、言葉を用いた意思疎通を図っていたはずである。

その後時代が下って、港川人やその後に住んだ人々に代わり、現代の沖縄人につながる縄文人が住み着き、「前期貝塚時代」と呼ばれる漁撈採集の時代となる。

これらに関し、埴原和郎の「日本人の骨とルーツ」44 頁には次の記載がある。

アイヌ系と琉球系の集団はともに縄文人を祖先とし、北東アジアからの渡来人たちの影響が少なかったという点で共通している。現代でもこの二つの集団が互いに多くの類似点を示すのは、このような理由によると考えてよさそうである。そうすると、縄文人から大きく変わってきたのはむしろ本土の集団ということになる。

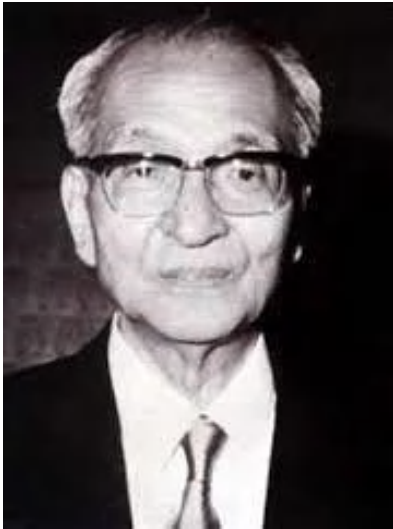
埴原のいう「北東アジアからの渡来人」とは、新モンゴロイドといわれる寒冷地適応をした人々のことで、稲作などの農耕文化をもって弥生時代を展開した。

埴原の説明と同様のことが、アイヌ研究者で考古学者の瀬川拓郎（1958 年～、旭川市博物館館長）の著書「アイヌ入門」13 頁にも、日本列島の北から南まで覆い縄文文化を支えた人びととしてアイヌと琉球人が挙げられている。

世界中のどの民族とも異なるアイヌの特徴を一言で表すとすれば、「日本列島の縄文人の特徴を色濃くとどめる人びと」ということになるでしょう。縄文文化は北海道から琉球列島にかけて一万年以上も続きましたが、アイヌは日本列島に暮らしたこの縄文人の特徴をよく残しているのです。

それでは、どの時代に本土から琉球へ日本祖語を話す人々の移動があったのか話題を進めなければならないが、先ずその前に、日本語それ自体いかなるものか知る必要がある。服部四郎の「日本語の系統」166～167 頁によれば次である。

琉球諸方言を含む現代日本諸方言の言語的核心部の日本祖語は、西暦紀元前後に北九州に栄えた弥生式文化の言語でないか。そして紀元後二、三世紀の頃、北九州から大和や琉球へかなり大きな住民移動があったのではないか。



服部四郎博士

服部四郎の「日本語の系統」の記述は、日本祖語から紀元後二、三世紀頃に琉球諸方言が分かれたとする比較言語学（類縁関係にある諸言語を比較することで、同系性や親縁性を見出したり、共通祖語を再構したりする学問）の見地からの研究結果である。

この中にある大和へ移動した人々は、先住者である縄文人を服従させて勢力を増し、やがて大和朝廷を樹立する。

この「日本語の系統」には、日本祖語から琉球諸方言へ分離の時期など詳説されているが、専門的記述から難解なところが多い。むしろ、沖縄史研究家で弁護士の新里恵二（1928～2013 年）の著書「沖縄史を語る」の方が簡明かつ理解が容易かと思ひ、その 82 頁以降から次の通り引用してみた。

先ず、日本本土に住みついた日本人の先祖たちと、琉球列島にやってきた沖縄人の先祖たちが、どこかで共同の生活をして、同じ言葉（祖語）を話していたと仮定してみる。そうすると、琉球語がいつごろ日本語と分かれたのかが分かれば、日本人と沖縄人が、いつごろから別々の生活をするようになったのかを考えるについて、一つの有力な手がかりが得られることになる。

言語年代学という言葉の移り変わりの年代を測定する学問があって、アメリカの学者によって考えだされたものである。かれらは、14 の言語をとりあげて、それぞれについて、日常よく使われる基礎的な単語の移り変わり調べた。その結果、どこの言語でも変化の速度はほぼ一定していることがわかった。かれらの計算によると、基礎的な単語が他の単語にとってかえられる率は、1000 年について約 19 パーセントだったというのだ。

アメリカの学者によりというのは、ニューヨーク市立大学他で教鞭を取ったモリス・スワデッシュ教授(1909~67年)のことである。続いて、

この言語年代学による研究と調査は、日本では東京大学の服部四郎博士を中心にすすめられている。奈良時代の大和地方の言語と、京都方言・東京方言とをくらべて計算してみたところ、この研究方法が、日本語についても役に立つ有力な方法でなかろうかと考えられはじめた。

ところで、同一の言語が分離して、甲と乙の言語になったとき、1000年たつと、甲は81パーセントの基礎語を残す。乙も1000年たつと81パーセントの基礎語を残す。したがって、同一祖語から分かれ出て1000年たった甲・乙の言語のあいだでは、 $0.18 \times 0.18 = 0.66$ (66パーセント) の共通単語があるはずだといえる。

そこで服部博士は、この計算法に独自の改良を加えた上で、京都方言と沖縄の首里方言、那覇方言とを比較して、分離の時期を計算された。(中略)

その結果、現代京都方言と首里方言との分離時期は、1450年ないし、1700余年前と推定された。日本語と琉球語とは、ちょうど弥生式時代から古墳時代ころに分離したのではないかと、考えられる訳だ。

具体的な分離に関する見解として、同書の85頁に次の記載がある。

問題なのは、首里方言と京都方言の共通の祖先にあたる日本祖語が、どこで話されていたかということだ。服部博士は、考古学や歴史学の研究成果を参照し、ことに沖縄語、沖縄史研究の先達だった伊波普猷(いばふゆう、1876~1947年)の意見など参照されて、日本祖語ははじめ九州で話され、後にその一部が近畿地方に、一部は奄美大島から沖縄方面へと移住したのではないかと推定され、「九州から琉球への移住も紀元後2~3世紀頃から起ったとすべきであろう」と記されている。

以上が、日本語と琉球語(沖縄方言)の学問的な考察結果である。

弥生文化の時代は、晩期縄文時代と一時は重なりつつ、紀元前10世紀(かつては、紀元前5世紀に始まりとの説が多かった)から紀元後3世紀中頃までとなる。この時代は絶えず大陸から北東アジア系の人々が北九州方面に移住し、それまでなかった水稲栽培を主とした農耕、家畜の利用、青銅器や鉄器の使用を含む文化を持ち込み、3世紀頃に北九州から畿内に移った(多分、邪馬台国と呼ばれた)勢力が、大和朝廷を打ち立て全国を統一したのは先に触れたとおりである。

その邪馬台国で使われていた言語が日本列島の大方を覆い、基本的には現在の日本語につながったとのでないかと、計量比較言語学者の安本美典(1934年~)は著書「日本語の起源を探る」153頁に記している。

このような状況下において、九州南部から西南諸島（九州南端から台湾北東部にかけての島嶼群）に向け大規模な集団移動が行われ、この集団が用いていた言語が琉球方言諸語となった可能性が高いとの推論である。

この移住が及ぼした言葉への影響とはどのようなものであったのか、その答えは「日本語の系統」173～174頁に記載されていた。

日本祖語民族（それは人種的には混質的であったかもしれない）のかなり有力な分派（数においても原住民にまさる集団）が、九州方面から、少なくとも沖縄本島の中頭・島尻地方のような豊かな土地に移住して地盤を作った蓋然性がある。ただし、当時沖縄島で有力に行われていた土着民の言語が、日本祖語以前に分出した日本語系の言語であったとすれば、日本祖語がそれを同化するためには、それほど大きな住民集団を必要としなかったであろう。また、このような北からの移住が度々行われているうちに琉球方言が成立した蓋然性もある。しかし、この場合にも、今より千百年以前以後には琉球地方の言語を大きく変化させるような北からの移住はなかったと考えなければならない。

註：蓋然性とは、広辞苑によれば「ある事が実際に起こるか否かの確実さの度合い」である。

上記の文章から、前段で記したこととの関連で新たな表現を読み取ることができる。それは次の二点である。

- ① 土着民の言語が、日本祖語以前に分出した日本語系の言語であった場合なら、それほど大きな住民集団を必要としなかったであろう。
- ② 今より千百年以前以後には琉球地方の言語を大きく変化させるような北からの移住はなかった。

① の場合では、先住民が縄文系の言葉を用いていたと仮定しても、日本祖語以前に分出した日本語系の言語であった可能性を探るのは無理である。だからといって、縄文時代に日本列島の北から南までアイヌ語に類する言語が覆っていたかどうかは、九州各地にアイヌ語から発したと思われる地名が随所に残っているととしても、むしろ否定的な見解が多い。何故ならば、「アイヌ語と上古日本語はきわめて古い時代に同じ祖語から分かれて、同じ祖語からの形を保っているものもあるかもしれない」と、安本美典の「日本語の起源を探る」に記しているが、アイヌ語と日本語は関係がないと説かれるほど類似性が少ない。

補足註：筆者は九州とアイヌ地名に関し、根本 治著の「九州先住民はアイヌー地

名学による探求」を所持していたが、どう探しても見当たらない。

② の場合なら、言語年代学により証明されるとおり、間違いなく記載の年代に相当する言語接触はなかった確実性は高い。それに、琉球は中国と日本の中間に位置しながら、隔離された状態が続いたことにより、文化的にも千年とか何百年という単位で後進性がみられる。

土着民と表記されている先住民の言語は、後来の人たちの言葉に何故置き換えられるのか。元々住んでいた人の言葉に同化されてもよさそうに思う疑問に対し、国語学者の大野晋(1919~200年)は「日本語の起源を探る」11頁に次のように記している。

言語の歴史を見て行く上では、《基層言語》を考える必要がある。ある地域に一つの言語が使われていたとする。そこに別の言語が入ってくる。それは多くは文明的に、あるいは軍事的に強い集団の言語である。受け入れ側の人々は生活の利益のためにその新しい言語を覚えて行き、何世代かの間にはやがて以前の古い言語を忘れて新しい言語に同化して行くことがある。

註：この大野晋の著書は、前出の安本美典の同名の書とは別物である。

筆者は様々な論評や研究を基に、琉球と日本の言語関連を考察してきたが、日本祖語を話す人々の移動などを次のように思量してみた。

① 島々の存在

当時の人たちは、南方のはるか彼方まで島々が連なっていることを知っていた。

② 琉球に住んでいた人

多くの先達が語るように、港川人やその後の人が島々から姿を消し、縄文系の人たちが住み着いていた。

③ 集団移動の理由

南九州には、記紀神話に登場する熊襲(くまそ)と呼ばれた縄文系の先住民がいて、大和朝廷に対する反抗勢力であった。弥生文化を持つ勢力が九州をしないで南下し、熊襲などの住民を服従させて進出したため、次第に人口過密となった可能性がある。原始社会において、人口過剰の調整方法は移動による拡散が常である。

④ 移動手段としての舟

移動の手段は舟で、舟は貴重な財産であった。割り舟(丸木舟)では大勢の人間が生活具を積んで移動するのは無理であろう。丸木舟で大勢を運べないなら、丸木舟に縦板や舷側板を組み合わせた準構舟により繰り出したのか、それに近距離の奄美などに一旦住んだ後、更に南下したのかなど謎は多い。

⑤ 島々への上陸

マングローブに覆われた地に陸地の空いているところから上陸し、先住民（同じ縄文系人）との間で争いは発生したのだろうか。先住民にとって、移住民は父祖の地に対する侵入者であり、武力抗争も必然だったと思われる。

⑥ 移住の規模と回数

規模や回数は解明できていない。移住があった時点の琉球は、未だ先史時代であったことから、推論するような状況証拠は極めて乏しいとみられる。

⑦ 携行品など

種籾や生活用品など、必要最小限の物は持参した可能性は否定できないが、持ち込んだ米作は風土の違いから成功に至らず消滅したのでなかろうか。その後は、先住民の生活態様に倣い漁撈採集を主とする生活が12世紀頃まで続いた。

⑧ 対外国交と言語接触

中山王の察度が明国と朝貢関係を結んだのは1372年で、それまでは外部（外国）の文化から影響を受けない時代が続いた。その後、1609年の薩摩藩侵攻後も独立国の体裁を保ったため、年経経過による言語の変化以外、外部から言語接触はほとんどなかった。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社

- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他 31 名、昭和 52 年 3 月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和 47 年 4 月 20 日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和 57 年 10 月 15 日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成 19 年 6 月 20 日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」、初版平成 11 年 7 月 10 日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成 9 年 9 月 30 日、角川書店発行
- ・ 瀬川拓郎著「アイヌ学入門」、初版 2015 年 2 月 20 日、(株)講談社発行
- ・ 服部四郎著「日本語の系統」、初版 1999 年 3 月 16 日、(株)岩波書店発行
- ・ 安本美典著「日本語の起源を探る」、初版 1990 年 10 月 5 日、(株)徳間書店発行
- ・ 河出書房新社編集部編「日本語の起源を探る」、初版 2003 年 5 月 10 日、河出書房新社発行